2014年10月24日の朝日新聞「山形版」に掲載されました。

幸福の赤いサクランボ

中国 3千キロ移動の旅へ

9月1日、私は新潟空港から2時間半のフライトで、4年ぶりに中国黒竜江省ハルビンを訪れた。

ハルビン国際空港の到着出口には、今回の旅行に同行し、通訳をしてくださる谷祖玲さん（黒竜江大学大学院日本文学科修了の28歳）が出迎えてくれた。

空港からハルビン市内のホテルまでタクシーで40分ほど走る間、私は谷さんと話しながら街中を走る車やビル群、歩く人々の装いに目を向けていた。

車は圧倒的に新型車が多く、以前訪れた時は、今にも崩れそうに見えた赤れんがの住宅密集地が、高層ビル群に変わっていた。道行く人たちの服装はカラフルで、表情も以前に比べて格段に明るくなったように感じた。

9月1日夕、ハルビンの松花江沿いの広場に立つ多田さん（左）と谷祖玲さん

ホテルにチェックインした後、ハルビンのメーンストリート、中央大街から松花江沿いの広場まで、名物のアイスキャンディーを食べたり、中秋節に向けて月餅（げっぺい）を売っている店などを眺めたりしながら散策し、谷さんお勧めの店で4種類の水ギョーザを食べた。

谷さんは黒竜江大学で日本文学を専攻し、修士論文を村上春樹の「1Q84」で書いた。

谷さんは「日本には一度も行ったことはないけれど、とても憧れを持っている。日本は何よりも正確さを大事にし、法規にのっとった社会で、とても清潔な国という印象を持っています」と話していた。さらに私の農園のホームページを見た印象として「宝石のように美しく、中国のサクランボとは比べ物にならない魅力がありますね。輸入規制が解かれれば、多くの中国人が多田さんのサクランボを買い求める日が来ると思いますよ」などと話してくれた。

翌朝7時に空港に向かい、十数人の韓国人旅行者と一緒にボンバルディア機で長白山空港に向けて出発した。総移動距離約3千㎞の黒竜江省東北部の旅が始まった。

多田耕太郎　1954年山辺町生まれ。金山町のスリッパ工場長を経て、41歳で就農。2009年に法人化し、2・1㌶のサクランボ園を経営する。